

はじめに

このたびは本書を手にとって読んでいただき、ありがとうございます。

さて、本書のタイトルにある「アドリブ授業」という言葉を見て、どんな印象をもたれたでしょうか。ひよっとしたら、「その場しのぎのお手軽な授業のことかな」「準備なんて必要なくなる魔法のような授業かな」と思われたかもしれません。

誤解があるといけないのではじめに説明すると、私が本書でお伝えする「アドリブ授業」とはそういった類のものではなく、**教師の台本をとびこえた学びを、子どもたちとその場でつくる授業**のことです。

「即興」を意味する「アドリブ」という言葉は、音楽や演劇、漫才などの世界でしばしば耳にすることがあるかと思えます。その場の雰囲気や、お客さんの気持ちにぴったりと合ったアド

リブが入ると、見ている人も舞台上で表現する人も、みんなの気持ちが一つになるような、大きな感動が生まれます。

私たちが毎日教室で行っている「授業」でも、同じようなことがいえるのではないのでしょうか。子どもの何気ないつぶやきを、教師が逃さずキャッチして、その場に合わせながら返していくことで、指導案には書かれていない新たな学びが生まれていく……そんな「心が躍る瞬間」があると思うのです。

少し大きいかもかもしれませんが、私はこの瞬間が、教師という仕事をしていて一番楽しい時だと感じています。

「もっと新しい発見を、子どもたちと授業の中でしていきたい！」

「どうすれば、あの時の授業のようなワクワクする瞬間を再現できるのだろうか？」

いつもそんなことを頭の中で考えながら生活しています。今回、そんな日々の授業を通して私を感じ、試してきた「アドリブ授業」の考え方や視点について書きました。

第1章では、「アドリブ授業」のとらえ方とその構成イメージ、

第2章では、授業の中でアドリブをする時の視点、

第3章では、実際のアドリブ授業の解説、

第4章では、アドリブ授業の「ひらめき」を生むために私が日常生活の中で行っていることを紹介しています。

「教師の考えを子どもたちに押し付けてしまっている授業スタイルを変えていきたい」

「『台本をとびこえて、子どもたちと共につくる授業』のイメージを知りたい」

「教師である自分も授業そのものを楽しみ続けたい」

普段こんなことを思っていらっしゃる先生方がいましたら、本書がそのヒントとなればこの上ない幸いです。

第1章

アドリブ授業のとらえ方 7

台本どおりにならないことの「よさ」 8

アドリブ力は才能ではない 16

アドリブ授業で意識している2つの要素 23

子どもと「新しい学び」を探し続ける教師の姿勢 33

アドリブの「きっかけ」と「場面」 44

第2章

授業でアドリブをしかけるための視点 49

✓ 授業導入 子どもと教師で行う「学びのチューニング」 50

✓ 授業導入 めあての言葉のひとり選考会議 60

✓ 板書 あえて型を3つに限定する 72

第3章

アドリブ授業の実際 129

✓ 板書 書きながら考えていること 76

✓ 展開 「学びの共通点」から話を広げる 85

✓ 展開 意外なつぶやきを「拾う場面」「拾わない場面」 93

✓ 見取り 子どもの視線の意味を考える 99

✓ 見取り 子どもが発信する「情報」をとらえる 105

✓ 見取り 子どもの行動の価値に気づく 109

アドリブ授業をするには何から練習すればよいか 116

実践① 道徳2年「学校たんけん」 130

実践② 国語2年「スイミー」 140

実践③ 算数3年「はしたの表し方」 150

実践④ 社会3年「火事からまちを守る」 160

実践⑤ 理科3年「実ができたよ」 170

アドリブ授業の とらえ方

授業でアドリブをひらめくための日常習慣

181

私の「問い」のとらえ方・関わり方 182

子どものヒットを分析する 194

材そのものの面白さでできること 205

「アイデアとその磨き上げ方」授業で実現させていくために 212

おわりに 221

参考文献 229

台本どおりにならないことの「よさ」

「はじめに」でも説明したように、私が本書で紹介する「アドリブ授業」とは、「教師の台本をとびこえた学びを、子どもたちとその場でつくる授業」のことです。

では逆に、「教師の台本どおりの授業」とは一体どういうものでしょうか？　まずはそこから考えてみます。

小・中学校の先生であれば、週案や指導案、自身の授業研究ノートなどに、授業の学習計画（いわゆる台本）を書いたことがあるはずです。このことは全く悪いことはありません。むしろ大切なことでしょう。しかし、この台本に書かれていることを、教師の計画どおりに押し付けて、子どもの学びの可能性をつぶしてしまうような場合は注意が必要です。

私が懸念しているのは「台本どおりの授業」がいきすぎるケース、つまり「子どもたちの考え方や表現したいこと、活動形態など、授業のすべてを教師がデザインし、型に当てはめてしまう場合」です。

授業とは、（当然のことながら）すべてが教師の思った通りに進んでいくものではありません。予想もしなかった子どもの意見によって、途中で流れが止まってしまうことや、当初の計画と全く違う方向に進んでいくようなこともしばしばあります。しかし、それが果たして本当に悪い授業なのでしょうか？　「台本どおりに進まない授業」は一見「うまくいっていない授業」のようにも見えますが、実は必ずしもそうではないと私は思っています。

ではその場合、台本どおりにならないことの「よさ」について私たちの生活を例に少し考えてみます。

例えば「他の誰かが書いたであろう原稿を、一字一句間違えずただ読み上げるスピーチ」と、「自分の今の気持ちや相手に伝わるように、必死に言葉を考えながら話すスピーチ」とでは、どちらの方が聞いている人の心を動かすかは明らかでしょう。

スポーツでも、実際に会場に行って試合を観戦するのと、深夜のスポーツニュースで編集された試合の映像を見るのでは、緊張感、興奮、感動が全く違ってきます。「この後どうなるのか」「この試合に勝てるのか、負けてしまうのか」……結果がわからないからこそ選手も含め、その時、その場で観戦している人たちの中だけに「リアルな感覚」が生まれます。「手に汗握る瞬間」とは、「不安」だけでなく、「期待」や「希望」もみんなて共有している時間とも考えられます。

このように考えると、私たちは「思ったとおりの結果や答え」を一方的に押し付けられることよりも、**そこに至るまでの過程をみんなと一緒に考えていくことに大きな意味を感じている**のだといえます。

私たち教師が毎日している授業でも同じようなことがいえそうです。

もし今日やる授業の「結果」がすでに決められているのであれば、教師はその答えが書かれたプリントを子どもに配ってあげれば、授業は5分で済むはずです。しかし実際は、「考え方のイメージ」だったり、「うまくできるようになるコツ」だったり、「試行錯誤すること」その

ものだったり……教科書やプリントには書かれていない「新しい何か」をみんなで見つけるために、私たちは「授業をする」のだと思うのです。

アドリブ授業とはこのような「**新しい学び**」をみんなてつくり出していく授業のスタイルだと私は考えています。

とはいえ、私自身もはじめからこのような考え方で授業をしていたわけではありません。紆余曲折しながら、今のやり方にたどり着きました。ここからは恥を承知で、私の昔の授業を紹介したいと思います。私がアドリブ授業を始めようと思ったきっかけにはこんな経緯がありました。

*

教師になって数年間、私はノートに授業の「流れ」を細かく書いていなければ、不安で45分間授業をすることができませんでした。

授業中に頭が真っ白にならないように、発問はもちろんのこと、「そうだね」「いいね」とい

った自分の反応もセリフとして書いていました。自分が子どもに言わせたい意見をノートに羅列し、授業のねらいに子どもたちが気づいていくための展開を毎日綿密に計画していました。自信のない自分が教師としてきちんと教壇で演じていくための「授業の台本」を本当につくっていたのだと思います。

研究授業や参観授業の時は、掲示物を貼る位置がずれないように黒板にセロテープに小さく印を付けていました。子どもから答えが出なかった時のためのヒントのカードや、映像資料を映す器械が動かなくなった時のための、大きく印刷した資料なども徹底的に準備していました。

「自分には授業の才能が無いのだから、無いなりに最大限の努力をすべきだ」という、当時の自分の取り組み方には、一定の意味があったとは思っています。冒頭でも紹介したとおり、授業の台本があることは悪いことではありません。ただ私は、この台本作りに注力するあまりに、その使い方を誤っていました。

何年かこのようなやり方で授業を重ねていくうちに、時間配分や、子どもの発表などが思いどおりに進むこと、つまり「自分の台本どおりに授業が進んでいくこと」に自信をもつようになってしまいました。そして「教師が綿密に考えた活動を計画どおりに進めていくことが、子どもにとって一番よい授業の形だ」と思い込んでいくようになりました。ここが大きな間違いだったと強く反省しています。

わかっていることを、声をびったりそろえて暗唱させたり、すでに私が決めている答えを子どもに当てさせたり……。このような「すべてが計画どおりに進んでいく授業」をして満足していたのは私だけで、子どもたちにとっては全然面白くないのだということを、私の授業を見た当時の同僚の先生から指摘していただき、それが大きな転機となりました。

その日から自分の授業を見つめ直しました。試行錯誤していく中で、「本当に面白い授業は、台本をとびこえて、子どもと一緒につくるものなんだ」「その時、その瞬間に生まれる学びこそがリアルなんだ」と気づいた時、「アドリブ授業」という新しい授業スタイルが自分の頭の中に生まれました。

教師が何か月もかけて準備して「これが正解だ！」と考える「授業の台本」や「答え」をとびこえて、実際の授業で子どもたちが気づくことの方がはるかに深く教材の本質をとらえてい

るというのはよくあることです。子どもたちのもっている可能性を授業に取り入れながら、臨機応変に「自分の台本」を書き換えていく——そんな新しい授業に挑戦したいと思うようになっていきました。

*

その後も試行錯誤を重ねていき、「アドリブ授業」は次のような可能性もある授業だとわかってきました。

- ・どこにたどり着くかわからない、ドキドキする過程をみんなで楽しむ授業
- ・教師にもわからなかった答えが、みんなで協力したらわかるかもしれない授業
- ・当初知りたかったことより、もっと大きな発見をしまうかもしれない授業

「はじめに」でもお伝えしたように、「アドリブ授業」は「教師が楽するための、その場しのごのお手軽な授業」ではありません。教師のねらいや思い、願いがきちんとあった上で、それを「とびこえようとする子どもの力」を引き出しながら進めていく、**本気で頭を使う楽しい授業**だと考えています。

次のページからは、これまで、私がアドリブ授業をやりながら実際に「試してきたこと」「考えてきたこと」を紹介していきます。